

## 原発と平和、幸福

小 出 裕 章

みなさん、こんにちは。今日をご参加くださりありがとうございます。真宗、本願寺派という、おそらく日本最大の仏教集団だろうと思いますが、そういうところで私に話をさせてくださるということで、申し訳ない気がしながらこの場に立っています。その上、今日私はタイトルを「原発と平和、幸福」というようなタイトルでできてしまいまして、仏教をずっとやってこられた方々に、私がそういう話をするのはいささか不遜ではないだろうかと思ひながらいます。ただ、長い年月、私は原子力というものにずっと携わってきて、昨年の三月に京都大学を定年退職したのですが、「原子力の問題というのは単に科学技術の問題ではない」と、時を経れば経るだけ思うようになりました。今日はそんなことを含めて聞いていただこうと思います。では、はじめます。

これ、お分りになるでしょうか。ここに何か金色に輝くものが写っていますが、これは人類が初めて炸裂させた原爆です。「トリニティー」という名前がついていました。今日は本願寺派、仏教の場ですけれども、この「トリニティー」という言葉はキリスト教の教義として大変重要な教義にあたっているものだそうです。神と神の子イエスと、そして聖霊というものが実は一体のものだ、三位一体という言葉で呼ばれているというような言葉なんだそ

うです。その「トリニティー」という言葉をつけてこの原爆を開発しました。この原爆が炸裂したのは、一九四五年の七月一六日です。この日はドイツのベルリンの郊外にポツダムという歴史の古い小さな町があるのですが、ここに米英ソ三国の首脳が集まって、日本にどうやって降伏勧告を突きつけるかという、その相談をしようというのが会談が始まった日の前の日です。それに合わせて米国はこの原爆を自分の国の砂漠・アラモゴルドという場所で爆発させました。ただ、いかんせん人類初めての原爆ですので、本当に爆発するのか、ということを知りませんでした。物理学者も知らない、軍人たちも半信半疑という中で、砂漠の一角に原爆を据え付けまして、何キロも離れたところにまずみんなが避難をして、そしてスイッチを押しました。そしてこのように火の玉が出現しまして、爆心地のものはすべて熔けてしまう。何キロも離れたところで見ていた物理学者、軍人たちのところに猛烈な爆風が押し寄せてくるという、そういう爆弾がついに炸裂した瞬間の写真です。そして、この原爆が炸裂したということはもちろん米国という国にとつては成功だったわけですね。何年もの長い年月をかけて、当時の日本の全国家財政をつぎ込むというほどのお金をかけて、十万人、二十万人といわれているような科学者・技術者・労働者を秘密都市に閉じ込めて、ようやくにして作られた原爆が、こういう形で爆発した、成功したということで、この実験の結果はすぐにポツダムに打電されました。そして米国の大統領トルーマンという大統領がそれを聞いて、隣に座っていたチャーチルに「俺たちはとうとうやった。原爆を作り上げた。これで戦後の世界は俺たちのものだ。」と耳打ちをしたというような逸話も残っています。そしてこの原爆はすぐに実戦で使われました。もちろんみなさんご承知の通り、広島です。（一九四五年の八月六日になってこんなキノコ雲が広島の上空に立ち上がりました。広島は砂漠ではありません。人々がそこで生きて生活している町というのが、このキノコ雲の下にあったわけです。この原爆の威力は、一六キロトンと言われています。キロというのは一〇〇〇倍という意味ですので、普通

に言えば一万六〇〇〇トン分の爆弾だったということです。

この年の三月、東京大空襲という空前絶後の空襲が東京でありました。当時、空の要塞と呼ばれたB二十九という巨大な爆撃機が三四〇機くらい東京の上空に飛来しました。三四〇機ってみなさん想像できるでしょうか。たとえば、一機目の飛行機が滑走路を飛び立っていく。その一分後にまた次のB二十九が滑走路を飛び立っていく、とやって一分ごとに飛び立ったとしても、三四〇機ものものが飛び立とうとすれば五時間も六時間もかかってしまうという、それほどたくさんさんのB二十九が東京の上空に次々と飛来して、雨やアラレと爆弾を落としました。東京の下町を中心にして四〇パーセントの町が焼き尽くされて、十万人の人が殺されたという空前絶後の大空襲でした。その時に落とされた爆弾の総量は一八〇〇トンでした。戦争を経験された方、この中にいらっしゃるかもしれません。が、当時一トン爆弾というのが一番大きな爆弾で、その一トン爆弾が落とされると町内一つが吹き飛ぶというくらい怖れられた爆弾でした。それが東京大空襲の時には一八〇〇個分というものがばら撒かれて、東京の町の四〇パーセントが焼き尽くされる、十万人が殺されるというようなことになったわけです。

しかし、広島の大空襲の時には、広島の大町に飛来したのはたった三機です。「エノラ・ゲイ」という名前の爆撃機を積んだ爆撃機B二十九、それから気象観測機、それから科学観測機というたった三機の飛行機が飛んできて、落とした爆弾はたった一発です。それがこんな巨大な爆弾になってしまったわけです。当時の広島の大町はこんな町でした。なんの変哲もない日本家屋がびっしりと立ち並んでいて、道路では路面電車が走っていて、人々がここで普通に生活するという町でした。左の奥の方に丸い屋根が見えるのですが、これが原爆ドームです。この上空六〇〇メートルのところで大空襲が炸裂しました。もちろん米国は知っていたわけです。こうやって人々が住んでいる、赤ん坊も子どもも男も女も、普通に生活をしているんだということを承知の上で、その町の頭上に原爆を落としました。

原爆ドームのこの屋根の上六〇〇メートルのところで原爆が炸裂して、一瞬にして広島町の町が壊滅してしまうという事になりました。

この写真は原爆が落とされた当日に撮られた写真の一枚です。一九四五年八月六日に撮られた写真は五枚しかありません。昔ですから、カメラそのものが貴重なものだったと思いますけれども、それでも新聞社でもなんでもあって、カメラマンもたくさんいたのですけれども、当日シャッターを切られて写真に残っているのは五枚しかないのです。なぜかといえば、あまりにも悲惨でシャッターが切れなかったというんです。これがようやくにしてシャッターを切って撮られた写真の一枚です。これは広島町の御幸橋という橋で撮られています。御幸橋というのはもう太田川が流れてきて、広島湾に出る河口のすぐ近くにあるところで、爆心地からいうと二・五キロくらい離れているところです。爆心地周辺はみんな吹き飛ばされて火事になっているわけですから、そこから人々が、逃げられる人は逃げてくる、そういう場所で撮られた写真です。みんな傷ついてこの場所に集まっているわけですから、中には立つことができない、座り込んでいる人、横になって動けない人たちが写っています。この人たちも、たぶんかなりの多くの方は、ごく短期間に亡くなられたんだと思います。でも生き延びた方もいらつします。被爆者というレッテルを背負って、ずっと生きてきた方々もこの写真に写っていて、(写真を指して)この方は「私だ」というように、生きていらつしやる方もいるのです。この写真の真ん中あたりに、剥き出しの足で短いスカートのようなものを履いた少女のような女性が写っています。彼女ですけれども、彼女は実は若い母親だったというのです。そして、ここに何か黒い物体を抱いているのですけれども、この時に彼女は「坊や！起きてちょうだい！」といいながら、この場所で走っていたという証言が残っています。こういう苦難というものが、十万人、二十万人というような数でこの日に出現したのです。とてつもない力でした。

私は戦後に生まれました。一九四九年生まれですので、戦争のことをまったく知らない世代です。でも、広島・長崎での被害というものが段々人々に知らされるようになった頃に、私は中学・高校という時代を過ごしていました。私は東京生まれの東京育ちなのですが、東京の町でも度々「原爆展」というようなものが行われて、原爆というのは本当に悲惨なんだということを心に刻みました。ただそのことは私の心の中にもう一つ、まったく違う思いを引き起こしました。「たった一つの爆弾で巨大な町を一つ吹き飛ばす程の力がある、それが原子力というものなんだ。そうならその力を爆弾としてではなくて、人類の平和のために使ったらどうなんだろう」と私は思い込んでしまいました。「原子力発電」というものですが、それをやることで広島・長崎の原爆の悲惨さをなんとか少しでも解消するというのはおかしいですけども、人類のために役立てて、傷を癒やしたいというように私自身は思い込みました。

日本というこの国が原子力に夢をかけた頃、どんなふうな夢をかけていたのかということを今から一枚新聞の記事をご覧に入れます。一九五四年七月二日の毎日新聞です。この一九五四年という年は、日本の国会で初めて原子炉建造予算というものが可決されて、これから日本は原子力をやるんだとすべてのマスコミが宣伝していた時代ですし、日本中あるいは世界の多くの国々で原子力にまだ夢を託すという時代でした。私が見ていたのは毎日新聞ですけども、他の新聞もみんな同じです。新聞社、ラジオ局等を含めてすべてのマスメディアが原子力に夢をかけていた時代でした。この新聞記事はこう始まります。「さて、原子力を潜在電力として考えると、まったくつもないものである。しかも石炭などの資源が今後地球上から次第に少なくなっていくことを思えば、このエネルギーのもつ威力は人類生存に不可欠なものと言って良いだろう」（一九五四年七月二日、毎日新聞）というのです。私は完璧に信じました。この宣伝を。石油にしても石炭にしても、化石燃料は使えばどうせ無くなってしま

当たり前のことなのであって、無くなってしまう。そうになると、人類のエネルギーはどうするんだ。そうだ、やっぱり原子力だ。あの広島・長崎の巨大な力を見れば、原子力を使う方がいいと私は思い込んだんです。みなさんはどうでしょう。この記事、正しいでしょうか。日本の国も電力会社もマスコミも今日までずっと一貫してこういう主張をしてきています。化石燃料が無くなっちゃうんだから、未来は原子力だと言ってきたのです。おそらく今日の会場にいらつしゃってくださっているみなさんも、これを信じているんじゃないかと、私は思います。みなさんが信じるのはむしろ当たり前のことだと思うのですが、実はこれまったく間違えているのです。私は原子力の勉強を始めてからそのことに気がつきました。地球上にある原子力の燃料であるウランというのは、そんなに資源の量が多くありません。地底からそれを掘ってきて、原子力発電というやり方でそれを燃やしたところで、いくらやったところで原子力発電から得られるエネルギーは石油から得られるエネルギーの数分の一しかないし、石炭から得られるエネルギーに比べれば数十分の一しかないという、誠に馬鹿げた資源だったのです。原子力の専門家であれば、みんなこれが間違えているということは知っているのですけれども、それでも今日に至るまでずっと「原子力は未来のエネルギー源だ」というように宣伝が行われて、多くの日本人は未だにこれを信じているという、そういう状態になってしまっています。

この新聞記事はさらに続きます。「電気料は二千分の一になる」（一九五四年七月二日、毎日新聞）、なりませんか？もちろんならないですね。私が夢をかけた頃は、原子力発電ができれば電気の値段が付けられないくらい安くになると言われていました。とんでもない話でした。電力会社の実際の経営データ「有価証券報告書」という報告書があるのですが、その報告書に基づいて原子力発電の発電単価を計算してみると、火力発電より高いのです。水力発電より高いのです。原子力発電に手を染めた結果、日本人の私たちは高い電気代を払わなければならないこと

にされてきてしまったということなんです。

この記事はさらに続きます。「原子力発電には火力発電のように大工場を必要としない。大煙突も貯炭場もいらない。また毎日石炭を運び込み、たきがらを捨てるための鉄道もトラックもいらない。密閉式のガスタービンが利用できればボイラーの水すらいらぬのである。もちろん山間へき地を選ぶこともない。ビルディングの地下室が発電所ということになる」(一九五四年七月二日、毎日新聞)という、こんな期待でした。あまりにも馬鹿げている。原子力発電所が火力発電所に比べて小さな工場で済む道理などありませんでした。原子力発電所だけは決して都会に建てるのができずに、過疎地に押し付けてきました。「ビルディングの地下室が発電所になる」というようなことなのであれば結構です。どうぞ京都にもたくさん作ってください。本願寺さん、広い敷地があります。この聞法会館、立派な建物がある。この地下にできるのか、といえば、そんなこと到底できなかったのです。つまり、こうして原子力にかけた夢というものはすべてが幻だったということなんです。いい加減に目を覚まさなければいけない。

その原子力発電、やっていることは実は非常に単純なことです。「単なる湯沸かし装置」と私は書きました。火力発電もそうです、湯沸かし装置です。火力発電は左の下に模式図を書きました。火力発電ではパイプの中に水を流します。パイプの外側から石油・石炭・天然ガスを燃やして、パイプの中の水を温めます。温められた水は沸騰して蒸気となって吹き出していきます。吹き出してきた蒸気でタービンという羽根車を回して、それに繋がっている発電機で電気を起こすという、これだけです。つまり、お湯を沸かししている。原子力発電も一緒です。左の上に書きました。繭のようなものが縦に書いてありますが、これは「原子炉圧力容器」と私たちが呼ぶ鋼鉄製の圧力釜です。その圧力釜の中にウランが漬けてありまして、ウランを燃やす、核分裂をさせるとエネルギーが出てきて、水

が沸騰して蒸気になって吹き出してきて、タービンを回して発電するという、これだけです。結局なんのことはない、ただお湯を沸かすという、そういう装置なんです。でもなぜこの原子力発電所というもののだけが都会には建てる事ができなかったかと言えば、その理由も簡単で、ここで燃やしているものがウランだから。ウランを核分裂させれば「核分裂生成物」という死の灰ができてしまう。それは超危険なものだから、原子力発電所は都会には建てるはならないということになったのです。

今ここに白いキャンバスを見ていただいています。私は今からこの左の下に小ぢやな四角を書きます。後ろのほうの方は見えないかもしれないので、よく見ていてください。これです。ここに書いた四角は、何を私が意味したいと思ったかという、この小ぢやな四角は広島原爆で燃えたウランの重量です。八〇〇グラムという重さをこの小ぢやな四角で書きました。今ここに水を用意していただいています。これたぶん二五〇ccか三〇〇ccか、そのくらいだと思います。これが三つ分くらいウランが核分裂したが故に、広島町が壊滅してしまうという猛烈なエネルギーを出したわけです。私はそれを知って、「よし、それならこのウランを使って原子力発電をやろう」と期待をかけたわけですが、私が期待をかけた原子力発電をやろうとすると、一体どれだけのウランを核分裂させなければいけないのかというと、これだけです。今日では一〇〇万キロワットという原子力発電所が標準になりましたが、その標準になった原子力発電所を一基一年運転するごとに、一トンのウランを核分裂させなければいけないのです。つまり、広島町の町を壊滅させたウランの、ゆうに千発分以上のウランを燃やさない限り、原子力発電所というのは動かないという、そういう機械なのです。猛烈に大量の燃料がいるということになってしまします。先程聞いていただいたように一基一年ごとにこんなに大量に燃料を必要とするなら、原子力の燃料であるウランは簡単に枯渇してしまうということになっているわけです。

そしてこのことはもう一つ重要なことを示しています。八〇〇グラムのウランが核分裂したということは、八〇〇グラムの核分裂生成物、死の灰ができたということを意味しています。一トンのウランを燃やしたということは、一トンの核分裂生成物、死の灰を作るということを意味しているわけです。つまり、私が期待をかけた、夢をかけた原子力発電をやろうとすると、それが一基一年動くごとに広島原爆の千発分以上の死の灰を生み出して、それを原子炉の中に溜め込んでいく、そういう機械だったのです。私はそれを知った時に、これはダメだと思いました。機械というものは、いつか事故というものを起こす。絶対に事故と無縁というような機械は存在しないと。そして人間というのは必ず誤りを犯す。完璧な人間なんていないわけです。そうなれば原子力発電所だっていつか大きな事故になるのではないかと私は怖れました。大きな事故が起きる前に、とにかく原子力発電をやめさせなければいけないと、私は思うようになって、ずっと原子力発電を止めたいとして自分の人生を歩んできました。原子力の専門家であればこれみんな知っていたんです。では、なんで原子力を推進しようとする専門家がたくさんいたのかといえ、彼らは「いやまあ大きな事故なんて起きないだろう」とまずは高をくくりました。でもやっぱり怖かったのです。

大きな事故が起きたら大変だということで、彼らは何をしたかというと原子力発電所だけは都会に建てないということをやったのです。今、日本地図を見ていただいています。この地図の上に日本でどういう場所に原子力発電所を建ててきたのかという歴史を見ていこうと思います。一番初めが東海村です。それから若狭湾の敦賀、美浜に作りました。その後、福島第一原子力発電所です。中国地方の島根、若狭湾の高浜、九州の玄海、静岡の浜岡、四国の伊方、若狭湾の大飯、福島第二原子力発電所、東北の女川、九州の川内、新潟の柏崎刈羽、北海道の泊、能登半島の志賀、下北半島の東通と、こういうところに原子力発電所を作ってきました。原子力発電をやろうとする

と、もう一つ再処理工場というものが要になるのですが、その再処理工場は青森県の六ヶ所村に作ろうとしてきました。今日はこの再処理工場の話をもったくする時間が無いのですが、この再処理工場は原子力発電所が一年間に放出する放射能を一日ごとに放出してしまうという程の超危険な工場で六ヶ所村に押し付けようとしてきました。二〇一一年三月一日に福島第一原子力発電所の事故が起きる前に、日本ではさらに二箇所に原子力発電所を建てる計画がありました。一つは、下北半島の最北端・大間、もう一つは瀬戸内海の外れの上関です。こうやって書いてきて、もうみなさん気づいてくださったと思いますけれども、これらの原子力発電所は東京・大阪・名古屋というような電気を大量に使う都会からはすべて離して作られたのです。長い送電線を敷いて、東京・大阪・名古屋という所に電気を送るというようなことをやってきました。電気の恩恵を受けるのは都会です。でもその都会は危険を受けたくないということで、危険を過疎地にシワ寄せするということをやってきたのです。こんな不公平で不正なことは、ただそれだけの理由でやってはいけません。私は思います。でも日本はずっとやってきたのです。都会にだけは原子力発電所を建てない。長い送電線を敷いてやるということをずっとやってきました。何でこんな不公平、不公平なことをやり続けてこられたのか、私は本当に愕然としますし、こんな事をやってはいけないということに何でみなさん気がつかないのかと思います。

でも、後から福島の事故の被害を聞いていただきますが、原子力発電が危険だということなんです。推進派の学者も知っていた。実際に福島の事故が起きてそれも証明されてしまったわけですが、それでもなお日本というこの国が原子力をやろうとしたことには実は理由があるのです。みなさんは、原子力というのは平和利用で、電気を起こすための装置なんだ、試みなんだというふうにずっと聞かされてきて、平和だ、平和だと思ってこられたのだと思います。実は日本で原子力をやろうと決めた一番の理由はそうではなかったのです。様々な政府の文書が残っ

ていて、それをみなさんにお見せすることもできるのですけれども、そうすると大変な時間がかかりますので、一つだけ。非常に端的に表現をしてくれた外務省の幹部の談話がありますので、それを見ていただきます。こうです。「個人としての見解だが、日本の外交力の裏付けとして核武装の選択の可能性を捨ててしまわない方がいい。保有能力はもつが当面政策としてもたないという形でいく。そのためにもプルトニウムの蓄積とミサイルに転用できるロケット技術は開発しておかなければならない」ということなんです。日本は何か平和国家だと思わせられてみなさんも来たんだと思いますが、日本はすでに世界第六番目の軍事大国になってしまっています。国連常任理事国五ヶ国に次ぐほどの巨大な軍事国家になってしまっていますし、核兵器についても「核武装の選択の可能性を捨ててしまわない方がいい」というのです。「保有能力はもっておく」と、「当面政策としてもたない」ということなのだというのをずっと日本というこの国は考えてやってきたわけです。「そのためにプルトニウムの蓄積とミサイルに転用できるロケット技術は開発しておかなければいけない」と言っています。このプルトニウムというのは、長崎に落とされた原爆の材料です。そして、平和利用と言いながら原子力発電を動かしてしまうと、その原子炉の中にどんどんプルトニウムが生み出されている、そういう道具だったのです。この国では平和利用と言いながら原子力発電を続けて、次々とプルトニウムを生み出してきました。そのプルトニウムは「使用済み燃料」というものの生み出されていくわけですが、それを「使用済み燃料」の中から分離して取り出さない限りはもちろん原爆の材料にならないのです。この分離して取り出す技術というのが「再処理」という先程ちょっと聞いていただいた技術です。日本にはその技術が無かったために、日本はこれまでイギリスとフランスの再処理工場に日本の使用済み燃料を送って再処理してもらって、プルトニウムを取り出してもらってきたのですが、一体どれだけのプルトニウムを取り出してきたかというのがこれです。一九九〇年のはじめぐらいから書いてあって、二〇〇〇十数年まで、

つい最近までのデータを書いています。で、この黄色い帯の一番高いところが日本の原子力発電所から生み出されたプルトニウムで、イギリスとフランスの再処理工場、一部は六ヶ所村で今作ろうとしている再処理工場が実験的に取り出したものもありますが、すでに分離して単体としてプルトニウムになっていて、原爆の材料になる、そのプルトニウムの量です。今現在、四八トンあります。青いところがイギリスやフランスからすでに日本に戻ってきているものですし、黄色い部分はまだ今現在はイギリスとフランスにありますけど、やがて日本に戻ってくるだろうプルトニウムです。では、四八トンのプルトニウムがあると、長崎に落とされた原爆はプルトニウムでできていたわけですが、それと同じような原爆が何発作れるかというと、右側に書きました。四〇〇〇です。すでにこの日本という国は、原子力の平和利用と言いながら、着々とプルトニウムの蓄積ということをやってきて、核武装の選択の可能性は捨ててしまわない、いつでも保有できる状態にしておくということを、こうやってすでにやってきたという国なのです。

日本では、原子力は平和利用だとずっと言われてきましたし、みなさんもたぶん今日までそう思われてきたのではないかと私は思います。例えば、英語には「Nuclear」という言葉があります。端的に訳すと「核」という言葉なのですが、この「Nuclear」という言葉が日本に入ってきて、日本語に訳される時には実は二通りに使い分けて訳されてきました。「Nuclear Weapon」という英語の単語があります。「Nuclear」が「核」で、「Weapon」は「兵器」ですから、非常に単純に訳せば「核兵器」です。日本でもちゃんと「核兵器」と訳されるんです。では、「Nuclear Power Plant」という英語の単語があるのですが、「Power Plant」というのは日本語で言えば「発電所」と訳されるものです。では、「Nuclear Power Plant」を日本で訳すとどうなるかというと、「原子力発電所」になってしまうのです。「核発電所」なんていう訳は日本では使わないで、核と原子力が何かあたたかも違うもので

あるかのように使い分けられてきました。では、「Nuclear Development」という英語の単語があります。「Development」は「開発」ですから、「Nuclear Development」を非常に簡単に訳せば「核開発」、もちろん今イランという国がウランを濃縮するという、原子力を進める時の一番基礎的な技術ですけれども、ウラン濃縮をしようとしているわけですし、朝鮮民主主義人民共和国という国が原子炉を動かしたりしているわけです。そういうものは「Nuclear Development」という言葉で呼ばれるわけですけれども、日本のマスコミが訳す時には必ず「核開発」と訳します。イランや朝鮮民主主義人民共和国は猛烈に悪いことをやっている、原爆を作ろうとしている、だから経済的な制裁を加えなければいけない。場合によっては、軍事制裁も必要だというように日本国政府が主張するし、マスコミもそう宣伝しているわけです。では、日本国内でウラン濃縮をする、あるいは原子炉を動かす、原子力発電をやるという時に、日本のマスコミがなんて訳すかというと「原子力開発」と訳しているわけです。みなさんそうやってずっとマスコミから宣伝を聞かされてきた。日本でやるものは、原子力開発で平和利用なのであって、文明国家として大切なものだ、これからどんどんやっていい、と言いながら同じことを、イランや朝鮮民主主義人民共和国がやろうとすればそれは「核開発」と訳して猛烈に悪いことというように国民に宣伝を流し続けてきたという、そういう歴史なんです。もちろん日本の政府も一貫してそう言ってきました。本音としては核武装するための能力を保持していたいと思っていたわけですけれども、でも国の方は日本でやっているのは平和利用だとずっと言いながら今日まで来てるし、マスコミも国民に対してそうやって宣伝を流してきたわけです。私はどんなことでも公平であるべきだと思います。他の人、他の国に「Nuclear Development」をやってはいけない、それが猛烈に悪いことだというのであれば、日本だってやってはいけないんです。他の人はダメだけど俺だけはいいいんていう、そんなふうには到底成り立たないということを知らなければいけないと私は思います。

そして残念ながら、福島第一原子力発電所の事故も起きてしまいました。この写真、みなさんも何度もお覧になった写真だと思います。手前に一列に並んでいるのはタービン建屋です。この建屋の中にタービンと発電機が並んでいます。そのタービンに蒸気を送るための原子炉は後ろに並んでいます。「原子炉建屋」と私たちが呼ぶ建屋に原子炉が入っていました。一番右にあるのが一号機です。二〇一一年三月十一日に運転中でした。巨大な地震と津波に襲われて、あえなく原子炉が熔け落ちてしまつて、原子炉が熔け落ちる過程で水素という爆発性のガスがでけるといふ物理化学的な理由があるのですが、大量の水素が発生して、原子炉建屋の最上階で爆発して建屋を吹き飛ばしてしまいました。骨組みだけになっている。隣にあるのが二号機です。二号機も当日運転中で、原子炉が熔け落ちてしまつて、大量の水素ガスが発生したはずなのですが、なぜかこの二号機はまだ原子炉建屋の姿が残っているように見えます。爆発はしなかったのです。なぜ爆発しなかったのかというと、この写真を注意深く見ていただきたいのですが、この部分に穴があいている。中から湯気が吹き出しています。ここには実は「ブローアウトパネル」と私たちが呼んでいる壁の板がはめ込んであつて、何か事が起きるとこの壁板がポツと外れるという、そういう壁板だったわけです。この壁板が、一号機が爆発した時の衝撃で外れて下に落ちました。そのため大量の水素が発生したのですが、この穴から外へ出てくれたがために爆発を免れるということになりました。でも原子炉の内部では二号機こそが最大の破壊を受けていて、環境に放射性物質を撒き散らした主犯人はこの二号機だと、国も東京電力も言っています。さらにその隣は三号機で、やはり運転中で原子炉が熔け落ちてしまつて、水素が爆発して建屋がボロボロになってしまいました。その隣が四号機です。この四号機は当日運転していませんでした。原子炉の中にあつた燃料もすべて取り出されて隣の使用済み燃料プールというプールに移されていたために、炉心が熔けるということとはなかったのです。ですから水素も発生しなかったはずなのですが、なぜかこの四号機でも巨大な

爆発が起きてこんなボロボロになってしまっています。その謎解きを今日みなさんに聞いていただく時間があります。なのでこの話はこれで終わりにしますけれども、見ていただいておわかりのように、一号機、二号機、三号機、四号機みんな壊れてしまった、そういう状態になりました。

その事故からすでに五年以上経ちました。でも事故は残念ながら今も続いているのです。一号機、二号機、三号機の炉心は熔け落ちてしまったと聞いていただきましたが、その熔け落ちた炉心が今どこにどんな状態であるのか、それがわかりません。私がわからないというのではなくて、東京電力もわからないし国もわからない、誰にもわからないという状態が五年以上経った今も続いているのです。なぜかといえば、現場に行かれないんです。事故を起こした発電所が火力発電所であれば簡単です。何日間か火事が続くかもしれないけれども、それが収まったら現場に行つてどんなふうに壊れているか調べることができる、大抵の場合は修理をしてすぐに稼働できるというのが普通のはずですが、原子力発電所が事故を起こした時には五年以上経った今も現場に行くことすらできないのです。こんな過酷な事故は原子力発電所以外には決して起きないというような事故が今続いているわけです。でも熔け落ちた炉心がどこかにあることだけはもちろん確実なことなのであって、その炉心をこれからまた熔かしてしまえばまた放射性物質が吹き出してきてしまう。そんなことはダメだからなんとしても熔かさないでおくしかない、ということで五年以上にわたってただひたすら水を掛けてきました。先程の図で見ていただいた繭を立てたようなもの、「原子炉圧力容器」という、もともと炉心がそこにあつたと思われる所にひたすら五年以上水を入れ続けるということをやってきたのです。しかし、そんなことをすれば掛けた水が今度は放射能で汚れた水になることは当たり前のことなのであって、毎日三〇〇トンというような放射能汚染水がどんどん増えてきてしまうことになっています。今現在福島第一原子力発電所の敷地の中に八十五万トンを超えるほどの放射能汚染水が溜まってしまつて、

東京電力はとにかくタンクを作ってそれを溜めようとしてきました。でも発電所の敷地にはもちろん広さの限界がありますので、もうほとんどこれ以上はできません。あまり遠くない将来に海へ流すということをやるしかない私は怖れています。でも環境に流す放射性物質を少しでも少なくしたいということで、今この瞬間でも福島第一原子力発電所の敷地の中では七〇〇〇人も労働者が放射能と闘っています。そういう労働者は東京電力の社員ではありません。東京電力が仕事をゼネコンに丸投げする、そしてそれがまた下請けに、孫請けに、また下請けに孫請けにというように多重な下請け関係の中で八次、九次、十次というような雇用関係になっているそうですが、下請けにいくごとに給料をピンはねされて実際に労働者の手に入る時には最低賃金にも満たないと言われるような過酷な労働環境の中で、最底辺の労働者たちが今放射能と闘っている、そういう状態になっています。すでに五年以上です。これがこれから何年、何十年とずっと続けるしかないという状態になっているのです。

そしてもう一つは敷地の外です。すでに大量に放射性物質が撒き散らされてしまつて敷地の外を汚しています。今現在もこれから何年、何十年とわかつて住民たちは被曝をしていくしかないという状態になっています。みなさん、お忘れになったというかたぶん気がついていないと思いますが、事故当日「原子力緊急事態宣言」というものが発令されました。大きな事故が起きた、今は緊急事態だということを日本国政府が発令したのです。それはどういう意味かというと、日本はもう法律を守らないという宣言なんです。日本には原子力、あるいは被曝ということに関してたぐさんの法律がありましたけれども、今は緊急事態だから法律ももう守れないと、そういう宣言をしたのです。そして今から見ていただきますけれども、放射能の汚染地に人々を棄ててしまうというのをやったわけですが、五年半以上経つてもこの「原子力緊急事態宣言」は解除されていないのです。つまり、今この日本という国は緊急事態宣言下にあるという、そういう国なんです。

これは日本国政府が公表した福島第一原子力発電所事故による汚染地図です。福島第一原子力発電所は南北ではほぼ中央、東西では東の端の太平洋岸にあります。この場所から大量の放射性物質が吹き出してきて、風に乗って南へ流れ、北へ流れ、西へ流れあちこちを汚染していったということを日本政府が地図上で色分けして示しているのです。原子力発電所から北西の方向に赤・黄・緑の色を塗った部分がありますが、この部分が猛烈な汚染を受けた所です。到底人は住めないということで、人々は強制的に避難をさせられました。避難って、みなさん分かっていただけるでしょうか。みなさんそれぞれ生活がある。家があつて、今日いまこの場所に来てくださっているわけですけど、朝ご自分の家で起きて、朝ごはんを食べて、昼ごはんを食べて、今この場所に来てくださっているだろうと思いますが、これが終わればみなさんまたご自宅に帰って夕食を食べる、そして寝る。明日はこんな仕事があるよ、明後日はこんな仕事があるよ、一年後にはこういうことをやろうかというような計画を立ててみなさん生活しているはずだと私は思います。でもそれが突然無くなるのです。事故が起きた、「原子力緊急事態宣言」が出た、もう出て行けということですべての生活が根こそぎ断ち切られる、ということまで十万人を超える人たちが避難させられました。そして五年半経とうとしている今でも帰れないのです。これから何十年も帰れない、それがこの範囲です。面積で言うと約一〇〇平方キロメートルあります。この京都、隣に琵琶湖がありますけれども、琵琶湖が一・五個入ってしまうというほどの広大な土地がもう人が住めないというほどの汚染を受けてしまいました。汚染はその他にも広がっています。福島県を南北に青い帯が縦断しています。福島県の中通りと私たちが呼んでいる所です。東側には阿武隈山地という山並みがありますし、西側には青森県からはじまる奥羽山脈という高い山並みが連なっています。両側を山で挟まれた平坦地で、大変住みやすいということで、北から伊達市、福島市、二本松市、郡山市、須賀川市、白河市というように、福島県内の大きな都市がみんなここにあったのですが、この山並

みに挟まれた平坦地を放射能の雲が舐めるように汚染していつて、中通りを汚染しました。その汚染は栃木県の北半分にも繋がっていますし、群馬県の北半分にも繋がっています。さらに西に行くとき長野県があるのですが、群馬県と長野県の県境には高い山並みが連なっていたために放射能の雲は山並みを越えるのではなくて、山腹を巻くようにして群馬県の西部を汚染しています。埼玉県西部、東京の奥多摩というところも汚染に巻き込んでいます。この群馬県の西部、くすんだ緑色で塗ってありますが、福島県の会津もそうです、それから宮城県南部・北部、岩手県の南部にもありますし、茨城県・千葉県・東京の下町の一部というところにもありますが、ここは日本国政府の言い分によると、一平方メートル、お分かりになりますね、一メートル四方にセシウムという放射性物質が三万ベクレル〜六万ベクレル降り積もったというのがこのくすんだ緑です。中通りを縦断している青い帯には、二種類の青があつて、薄い青が内側にあるし、外側に濃い青があるのですが、濃い青のところは一平方メートルあたり六万ベクレル〜一〇万ベクレル、薄い青のところは一〇万ベクレル〜三〇万ベクレルセシウムが降り積もったといっている汚染地帯です。

ではその数字の意味はどういうことかということで、一つ比較の例を聞いていただきます。私は先程も紹介いただきましたけれども、京都大学原子炉実験所という職場で働いていました。京都大学というと、みなさん私の職場が京都にあったと思われるかもしれませんが、もちろんありません。私の職場には文字通り原子炉がありました。おもちやのように小さな原子炉ですけれども、人が住んでいる所には作ってはいけないということで、京都大学ですけれども京都の町中には作ることができませんでした。そして、一九六〇年のはじめに建てられたんですけれども、大阪府泉南郡熊取町という当時は本当に過疎地と言つては失礼けれども人が住んでいないような所に私の職場の原子炉実験所が建てられました。その中でもおもちやのような原子炉を動かして放射能を扱つて、私なんかもず

つと仕事をしてきたのです。でも放射能を取り扱う時には、たとえばこの壇の上で私が放射能を開いて実験しているかというところもろんダメなんです。放射能を取り扱う時には普通の人たちが立ち入らないような特殊な場所です。か使つてはいけないということで、「放射線管理区域」と呼ぶ場所です。みなさんは足を踏み込むことがまず許されません。私のような特殊な人間だけがその場所に入るのですが、入ったら水を飲むことが禁じられます。食べ物を食べることもできません。寝ることもできません。管理区域の中にはトイレありませんので排泄すらできないという、そういう場所です。そこで私は仕事をする。仕事が終わったら管理区域の外に出ようとするのですが、管理区域の出口には扉があつて常に閉まっています。それを開けようと思う時には、一つの作業をしなければいけません。なぜかという、私が管理区域の中で仕事をしたということは、私の実験着が放射能で汚れているかもしれない、私の手だつて足だつて汚れているかもしれない、そのまま管理区域のドアを開けて外に出てしまえば外にいる普通の人々を被曝させてしまう、そんなことはダメだから管理区域から出る時には管理区域の中に放射能を測定する機械があつて、それで衣服が汚れていないか、手が汚れていないかということを計らない限りドアは開けない。そして、ドアを開ける基準は一平方メートルあたり四万ベクレル、つまり一平方メートルあたり四万ベクレルを超えて放射能で汚れているようなものは、例えば実験着であっても、私が持ち込んだ実験道具であっても、そんなものはもう持ち出すことができなくなる、管理区域の外側にはそういう汚染物は持ち出してはならないというのが日本の法律だったのです。しかし、このくすんだ緑は一平方メートルあたり三万ベクレル、六万ベクレル、青いところは六万ベクレルを超えて汚れているということなんです。それも、私の実験着が汚れている、私の手が汚れているというのではなくて、大地全部が汚れているのです。そう日本政府が言っているんです。ここは京都です。西本願寺という大きなお寺がある。聞法会館という大きな建物もある。でも京都は

幸いなことに福島事故で大きな汚染を受けなかったんです。でも、もしこの聞法会館が福島市にあったと想像してください。この建物全部が放射線管理区域以上に汚染しているんです。西本願寺の広大な敷地も全部汚れている。伽藍も汚れている。道路に出れば道路も汚れているんです。鴨川に行けば鴨川が、桂川に行けば桂川が、東山に行けば東山が、北山に行けば北山が汚れている、とにかく全部が汚れてしまったと言っているんです。本当のことを言えば、東北地方と関東地方の広大なところが放射線管理区域にしなければいけないほど汚れているのです。でも日本国政府はそういう汚れを地図に自分で示しながら、もうこれはどうしようもない、今は「原子力緊急事態宣言」を出した緊急事態なんだ、だからこういうところに人々が住んでもいいということで棄ててしまったということになっているのです。残念ながら放射能は五感で感じられません。みなさんずっとそうやって聞いてきたと思います。なぜかということを少し聞いていただこうかと思えます。

福島第一原子力発電所の事故が起きて大量の放射性物質が環境に放出されました。日本国政府が国際原子力機関 IAEA という組織に報告書を出して、その中で大気中に放出したセシウム一三七という、これも核分裂生成物の一種ですけれども、それがどれだけだったかということを数字で示しています。今現在福島を中心とした東北地方・関東地方を広大に汚染しているのは、この放射性物質なんですけれども、その量は一・五×一〇の一六乗ベクレルだと日本国政府は言っています。そして、そのうち日本の国土に降ったのはどれだけか、今見ていただいた東北地方・関東地方の広大なところに降ったセシウム一三七はどれだけだったかという、私の知人の澤野さんという方が丹念にデータを調べて計算してくれました。その全量は二・四×一〇の一五乗ベクレルになりました。一・五×一〇の一六乗ベクレル出して、日本の国土に降ったのが二・四×一〇の一五乗ベクレル、つまり一六パーセントだけなんです。八四パーセントは実は太平洋に向かって流れていってくれた。日本というこの国としては大変有り難

いことだったと思いますが、ほとんどはみんな太平洋に流れていって、一割、二割だけが日本の東北地方・関東地方を汚したということになりました。でもみなさん、この一・五×一〇の一六乗ベクレル、二・四×一〇の一五乗ベクレルなんていう数字を見ても、全然ピンとこないだろうと思います。「ベクレル」というのは放射能の単位で、みなさんこんな単位使ったことないはずで、当たり前のことだと思えます。そこで、ではこの放射能の単位で表したセシウム一三七は、重さにすればどれだけになるかということを計算してお見せします。福島第一原子力発電所から大気中に放出されたセシウム一三七の全量は重さにして四・七キログラムしかありません。先程地図を見ていただいた東北地方・関東地方の広大なところを放射線管理区域にしなければいけない以上に汚したセシウム一三七の重量は、全部かき集めてきてもわずか七五〇グラムにしかありません。こんな微量なものが広大な地域を人間が住めない土地に汚染してしまうということなのであって、こんなもの五感で感じられるはずがないんです。なんで放射能が五感で感じられないと言うのかといえば、五感で感じられるほどに放射能が身の回りにあれば、五感に感じる前に人間が死んでしまうからなんです。そういうものを相手に今私たちは闘っています。これは柚木みさとさんというイラストレーターが描いたイラストです。「赤いつぶつぶのイラスト」と私たちは呼んでいます。この赤いつぶつぶが放射能を意味しています。今、先程見ていただいたように日本の東北地方・関東地方の膨大な地域が放射線管理区域にしなければいけない以上に大地が汚れているのです。私が言っているのではなくて、日本政府が地図を作って示しているのです。そして、その場所に子どもも含めて棄てられているんです。緊急事態だから法律を守らなくてもいいと日本政府が言って棄てられている。私は時々福島に行きますけれども、行くたびに思います、放射能が目に見えればいいのになつて。そうすれば危険だということがわかるけれども、残念ながら見えません。そして、普通に子どもたちがそこで水を飲む、食べ物も食べる、寝る、もちろんトイレの排泄も

するというふうに今生きているという状態になってしまっている。今日この会場に来てくださっているみなさん、私は大変有り難いみなさんだと思うし、お礼を申し上げたいと思います。ただし、福島事故を引き起こした、あるいは日本で原子力の暴走を許した、少なくとも見て見ないフリをしてきたという責任はたぶんみなさんにもあるだろうと私は思っています。でも、子どもたちには責任は無いわけです。そしておまけに子どもたちは被曝に対して大変敏感です。今そのことを見ていただこうと思います。

「放射線癌死の年齢依存性」というものを見ていただこうと思います。被曝によって癌で死んでいくということがわかっていくわけですが、それが被曝をした時の年齢ごとにどれだけ違うかということをお見せします。ただし、これを説明しようと思うと大変時間がかかってしまうので、極々端折った形で聞いていただきます。まず、被曝した人が三〇歳だとすると、その人が癌で死ぬ危険性はこの帯の高さだと思ってください。そして、この帯の高さというのは年寄りから赤ん坊まで全年齢を平均した時の危険度とほとんど等しいです。今日この会場に三〇歳ぐらいの方、あんまりいらっしやらないように見えますけれども、もし三〇歳ぐらいの方がいらっしやれば、自分は人間として平均的な被曝の危険度をもっていると思っていただければいいと思います。そして、歳をとっていくと被曝にどんどん鈍感になります。なぜかという、被曝をしてどこか、例えば私の体の細胞が癌になるという運命づけを与えられる。その細胞は、細胞分裂して大きくなっていく。で、どんどん大きくなってやがて私を殺すほどの癌になるということになるわけですが、もう私は六十歳を過ぎて細胞分裂なんてほとんどしないんですね、成長もしない、そういう人間になっている。歳をとればとるだけ生命体としては衰えていくわけで、細胞分裂をしなくなる。だから傷を受けてもそれが被害に結びつかないということになるわけです。どのくらいかというと、こんなんです。五十歳、五十五歳にもなれば平均的な危険度が七十分の一、八十分の一というぐらいの危険度しかないのだ

す。今日この会場にいらつしやるみなさん、ほとんどこういう世代の方ですので、危険が無いわけではありませんけれども、かなり安心していい、そういう世代に当たります。ただし、私を含めてこういう世代の人間が、日本で原子力の暴走を許してきた世代なのです。その私たちはこれからほとんど被害を受けずに済んでしまうということになります。逆に子どもたちは大変です。○歳の赤ん坊にもなれば、平均的な危険度の四倍、五倍の危険を負わされてしまう。○歳、五歳、十歳というように毎日見てもおもしろいほどに成長していく、そういう子どもたちが危険を一手に負わされてしまうということになってしまうわけです。こんなことは到底許されないことだと私は思います。

今私たちは何をすべきだといえ、私はたった一つだと思います。先程も聞いていただいたように、日本の大人にはみなさんながしかの責任があると思います。そういう大人としてやるべきことは、自分が仮に被曝しようとも子どもたちだけは被曝をさせないようにしなければいけないということです。今日この会場にいらつしやる方々にも、ぜひともこの事はお願しておきたいと思っています。何か少しでもできることがあれば、そのたびにお力を貸してください。時間を全部に使ってしまいましたけれども、これからどうすべきかというようなことを一つだけ聞いていただきます。

私は、まずは原子力は絶対にやめるべきだと思っています。福島第一原子力発電所の事故を見て、私はそれをさるに思いました。私がこの事故から得た教訓というのは、こうです。原子力発電所事故は本当に悲惨な被害を与えることになる。そうであるなら、原子力発電所は即刻廃絶すべきだ。そうしなければいけないという教訓を私は得ました。しかし、原子力を進めてきた人たちが得た教訓はまったく違っていたのです。彼らはどういう教訓を得たかという、福島第一原子力発電所の事故を起こしても誰も処罰されない、誰も責任をとらなくても済むというこ

とを第一の教訓として彼らは学んだんです。東京電力の会長、社長以下誰も責任をとらされない。原子力発電を進めてきた歴代の自民党首脳も誰も責任をとらないで済む。これなら何にも怖くない、ということですからまた再稼働して金を儲けようということになっているわけです。本当にめちゃくちゃな国だと私は思います。この地球という星で私たちは長い間生きてきました。この地球は宇宙に浮かんでいるほんの些細な星ですけれども、真つ暗闇な宇宙の中で青く輝く、宇宙から見ると大変綺麗な星なんです。これは月から見た地球です。宇宙という広大無辺な広がりがある、ただだけ広いか未だによくわからないというそれほどの宇宙というものがある、その宇宙にこの地球がある。そして人間が、これまで宇宙のどこかに命が根付いている星は無いかとずっと探し続けてきているんですけども、地球以外には命を見つけない。この星というのは大変稀有な命が根付けた星なわけです。この星ができたのは、四十六億年前だと今は考えられています。その星に人類という生き物も生まれてきました。はじめは猿だかゴリラだかというような生き物が、ある日直立して歩けるようになった。これが約七〇〇万年前なのだそうです。でもこの頃は自然に溶け込むようにたぶん生きていた、その人類がまた進化というのでしょうか、少しずつ進化してきて、ある時に道具を使って他の動物をとって食うようになったという時代になりました。これが約一〇万年前。それからまた歴史を辿って、農耕を覚えて、農耕ができれば畑の周りに定住することができるということになりました。これが約一万年前だそうです。そして現在の私たちのようにビルを二ヨキニヨキ建ててエネルギーをたくさん使って生活するという時代になりました。一体人類というものがこれまでどれだけエネルギーを使って生きてきたのかということを一枚の図にしたのがこれです。時間が左から右へ流れていきます。一番左の方に「数百万年前」「原始人」と書いてありますが、約七〇〇万年前だと思ってください。それから長い歴史を経て、数十万年前に「狩獵人」、紀元前五〇〇〇年に「初期農業者」と書きましたが、時間が少しず

つ流れてきた。そして、ここに帯が立ててあるのですが、この帯はそれぞれの時代の人間が一人一日あたりどれだけのエネルギーを使ったかを示しています。もちろん「原始人」という人たちはほとんどエネルギーなんか使わずに自然に溶け込むように生きていた。狩りを覚えたところでほとんどエネルギーを使わない。農耕を覚えて少しエネルギーを使うようになってきたけれども、ほとんどエネルギーを使うような人間になってきたということを示しています。そしてこの図の左の下から一本の黒い線がずっと書いてあるのですが、この線は何を示したかというと、人類という生き物全体で一年間にどれだけのエネルギーを使ったのかということをこの線で書いてあります。もちろん原始人とか狩猟人とかいう時代の人は人類全体でもほとんどエネルギーを使っていなかったわけです。では、急激にエネルギーを使うようになったのはいつなのかというところ、あ、ごめんなさい、そうですね。ここに「お釈迦さんの誕生」というのを書きました。紀元前何百年という、こんなころだと思いますが、ここで誕生しています。お釈迦さんの時代はほとんどエネルギーを使わないという時代でした。でも、エネルギーを大量に使うようになってというのは産業革命が起きてからです。私、先程「火力発電も原子力発電も湯沸かし装置だ」と言いました。私たちの言葉で言うところの「蒸気機関」というのですが、水を沸騰させて蒸気にできれば様々な機械が動く、もう家畜もいらなければ奴隷もいらぬ。とにかくエネルギーさえあれば豊かになれるという時代がここから始まって、人間が膨大なエネルギーを使うようになってきたわけです。そしてこの図、私は、時間が左から右へ流れているとみなさんに聞いていただいたわけですが、この時間の流れの尺度はまったくインチキです。自分でみなさんに見せておきながらインチキというのも気が引けますが、右の方ではかなりの幅で一〇〇年という時間を示していますし、左の方ではほんの僅かな幅で数百万年という時間を示していて、まったくでたらめな図なわけです。でもこの図しか描けなかったのです。なぜかといえば、この幅で一〇〇年を書こうと思えば数百万年という時間の長さは一体ど

これから描き始めればいいのかわからない、そういうことになってしまいうわけです。今ここに一枚写真を見ていただきます。おわかりになりますか？ここが聞法会館です。今ここに私、円を五つ書いて、一つ一〇〇メートルの円を書いて、一〇〇メートル、二〇〇メートル、三〇〇メートル、四〇〇メートル、最後だけがちよつと幅が狭いことがわかっていただけだと思いますが、これが六〇メートルなんです。これ全体で言うとうと四六〇メートルの円をここに描きました。西本願寺、広大な敷地があるし、東本願寺も広大な敷地があつて、京都駅がここにある。四六〇メートルは西本願寺の外れくらいから歩いて来るとこの聞法会館に来るわけです。何で私が四六〇メートルなんていう中途半端な円を描いたかという、この距離を地球の歴史、四十六億年という時間の長さに置き換えてみなさんに想像してほしい。例えば西本願寺のこの南東の端くらいに地球が誕生した。そして、聞法会館の今の場所が現在とする。その歴史がずっと流れてきて現在に至るということを想像してください。地球が生まれて歴史がずっと流れてこの聞法会館のこの場所に来るまでのどの場所で人類が地球上に現れましたか？今私はこう聞いたんですね。地球誕生は四十六億年前で、それを四六〇メートルの長さにたとえ、人間が生まれた七〇〇万年前というのはどのくらいの距離になるとみなさん思いますかつて聞きました。答えを言つてしましますと、七〇センチです。西本願寺の外れからずっと歩いてきて、西本願寺の広大な敷地を全部横切つても、人間は地球上にはいないんです。聞法会館の敷地に入つても人間はいないのです。この会場に入つても、私が現在という場所に当たるとすれば、そのドアを開けて会場に入つても、この地球には人間はいないんです。ずっと近づいてきて、七〇センチのところに来てようやく人間という生き物が地球に現れたと、そういう時間の長さなのです。そして、私たちの祖先は「ホモ・サピエンス」と言っている人間の一種の種族ですけども、それは二〇万年前、狩りを覚えるようになる頃に生まれたと言われていますが、その私たちの祖先が生まれた時ならば僅か二センチ。お釈迦さんが誕生したのは二

六〇〇年前くらいだと言われています。これはどのくらいの長さかといえば、〇・二六ミリです。親鸞さんも生まれたのは八四三年前ですけれども、そんなのはもう一ミリにも満たないという長さです。産業革命というのは二〇〇年前くらいに起きているのですけれども、人間が膨大にエネルギーを使うようになった時代というのは、今から言えば〇・〇二ミリにしかならない。いいですか、西本願寺の南東の角から歩きはじめてここに辿り着くまでが地球の歴史だとすると、人間が膨大にこの地球上のエネルギーを使いだしたなんていうのはもう測ることすらできないような時間なんですね。こんなことを本当にやっていいんだろうかと私は思います。でもとにかくやっているんです。エネルギーがあれば幸せなんだ、エネルギーがあれば豊かに生きられるんだ、みんなそうやって思っているとかく開発だ、発展だ、エネルギーだと言って今日まで来てしまいました。でも世界あるいは人類が一樣にそうやって今日まで歴史を辿って来たかと言えば、そうではありません。膨大にエネルギーを使う国もあるし、ほとんどエネルギーを未だに使えないという国も世界にはたくさんあるのです。

そして、エネルギーというのは人間がどれだけ長く生きられるかということにもかなり深く関係しています。そのことをわかっていただきたくて、私は一枚の図を作りました。横軸が一人一日あたりのエネルギー消費量で、右に行けば行くだけ使える。縦軸の方は平均寿命です。世界に今二〇〇カ国くらいの国があるのですが、それぞれの国の人々が平均的にどれだけエネルギーを使えて、それぞれの国の人々はどれだけの平均寿命があるのかということ、ここに私は点を打って描いてみたのです。こうやって描いてみて私は気がつきました。エネルギーをほとんど使えないような場合には、平均寿命が四〇歳、五〇歳というような国がまだアフリカを中心にしてたくさんある。そしてエネルギーを少しでも使えるようになっていくと、寿命はどんどん延びて一人一日あたりエネルギー消費量が四万キロカロリー、五万キロカロリーになればもう寿命が七十歳を突破できる、あるいは八十歳に近い国だって

できているということになっている。逆にエネルギーを使ったところでもう寿命が全然のびないよと、人間という生き物は約八十歳で寿命が尽きるといふ生き物だということをこの図は示していると、私は思いました。エネルギーを使えないがために、窮乏しているがために死んでいかなければならないという国が一方にあるし、一方には膨大にエネルギーを使いながらも平均寿命なんてのびない、つまり生きるためとは関係ないエネルギーを使っているという国がたくさんあるということに気がきました。この図はいろんな印で描いてあるのですが、誤解を怖れずに言ってしまうと、白抜き色の国々は白人の国です。色で塗りつぶした国は有色人種の国なんです。つまり、現在の世界というのは白人の国が膨大なエネルギーを使って享楽的に生きている。一方ではエネルギーを使えないために有色人種の国々では、四十歳、五十歳で死んでいるという国があるということを示している。幸か不幸か、日本はここにある。白人の国の仲間入りをして、一人一日あたり十二万キロカロリーというようなエネルギーを使って、こういう立派な建物の中で、私も今電気を使ってみなさんに見てもらおうというようなことをやっているわけです。そんなことをしてきて、この命が根付けた稀有な星である地球上でたくさんの生き物が生きているわけですけれども、人間以外の生き物がどれだけ絶滅に追い込まれたかというのを示すのがこの図です。生き物というものが個体として死ぬというのは当たり前ですね。私ももうじき死ぬし、みなさんだってどっちにしたらついでに死ね。生物種としたっていつか必ず絶滅するんです。仕方ないことです。この地球は七千万年ほど前には恐竜という生き物が地球を支配していたわけですけども、ある時に恐竜はみんな絶滅していなくなりました。種としての絶滅、仕方がない。一五〇〇年のときも一六〇〇年のときも一七〇〇年のときも、絶滅していく生き物がいたんです。しかし、人間が産業革命を起こして膨大なエネルギーを使うようになってから、それに軌を一にするようにして膨大な生き物が今どんどん絶滅に追い込まれていつていう、そういう時代なんです。生き物というのは大変不思議

なものです。お互いに支え合っているんです。生きとし生けるものすべてがお互いを支え合って生きています。植物が育つから動物が生きられます。動物が死ねばバクテリアが分解して、また植物の栄養になる。精密な織物でも織るようにみんなが支え合っているわけですけれども、その一族である人間がほんの刹那的な時間に膨大なエネルギーを使うようになって他の生き物をどんどん絶滅に追い込むというようなことをやっているんです。こんなことをすれば人間自身がいずれそう遠からず絶滅することになるだろうと私は思います。人間は自分のことを万物の霊長だと呼んでいますけれども、実はそうではなかった。他の生き物をたくさん虐殺しながら、挙句の果てに自分も滅びるという誠に愚かな生き物なんだと私は思うようになりました。でも、私は今人間が愚かだと言いましたが、でも先程見ていただいたようにすべての人間ではないんです。この地球上に生きている人間でも猛烈な差別があつて、エネルギーをどんどん使いたい、豊かになりたいというような国が一方にある中で、エネルギーを使えないまま死んでいくという国があるのです。

これは『飢餓』という写真集からとってきた写真です。三留理男さんという私の尊敬する写真家が撮った写真です。この写真集の中で三留さんはこう書いています。「飢餓は地平線の彼方から訪れた苦しみではない。人間が種をまき育てたものである。もし誰かが何かをなしたなら、あるいはなさなかったなら、事態はこれほど酷くはならなかったであろう」と書いています。今日読んでくださった「浄土真宗の教章」というのでしょうか、「私の歩む道」という文章がありました。そこにはこう書いてあります。「この宗門は親鸞聖人の教えを仰ぎ、念仏を申す人々の集う同朋教団であり、人々に阿弥陀如来の智慧と慈悲を伝える教団である。それによつて自他ともに心豊かに生きることのできる社会の実現に貢献する」と。これが本願寺派の教えのエッセンスなのだそうです。もちろん、智慧と慈悲という心の問題ですから、そういう心を育てるということは教団の大切な仕事なのだと思いますけれど

も、「自他ともに心豊かに生きることのできる社会を実現する」というときには、社会というこのそのものにどうやって関わるのかということもやはり私は問われているのだろうと思います。

私は申し訳ありませんがまったくの無宗教者で、真宗の門徒でもありませんし仏教徒でもない、キリスト教徒でもイスラム教徒でもありません。そんな私が宗教をもっている方々に言うのは大変申し訳ないと思うけれども、でも宗教だって社会と無縁であるはずではないので、社会の中でどうやってその教えを維持するのか、広めるのかということがやはり大切なことだろうと思いますので、この現実の社会になんとかコミットするように働いていただきたいと思います。

地球は有限です。現在の地球の人類がすべて工業文明国、つまり日本のようなエネルギー浪費国家並のエネルギーを使おうとすれば、世界の生態系は必ず破壊されます。もうすでに破壊されているんですけれども、これからエネルギーを使えなかった地球上のほとんどの国、七割八割の国々が私たち日本人のようにエネルギーを使おうとするなら、必ずこの地球の生態系が壊れてしまうという、そういうところまでもう来ているというわけです。命が根付くことができたこの地球という稀有な星、それをこのままなんとか維持しようと思えば、エネルギーの浪費を抑えるしかないんです。原子力がダメなら違うエネルギー源をもってこいとか、そんなことではない。エネルギーを使い過ぎているということに気づかなければいけないということだと私は思います。たしかに先程見ていただいたように、人間が生きて、平均寿命を延ばすということにもエネルギーというものは大変大切なものです。それが使えないからといって死んでしまっていく人々だっている。もちろん心豊かに生きるなんてことは彼らにはできない、そういう人たちが世界にたくさんいる。今現在十一億の人々は国連が定義する絶対的貧困という状態になっています。一日百円しか使えない。綺麗な水もなければ、ちゃんとした食べ物もないという人々が十一億人です。そのう

ち五億人は飢餓に瀕していると。先程見ていただいたように飢餓で苦しむ子どものような状態になっているのです。一方私たちの国、日本というようなところでは、生きるつていうこととはもう無関係にとかく贅沢、享樂的に生きるためにエネルギーがほしい、どんどんエネルギーを使いたいというようなことを未だに言っている国なんです。こんな生き方というのは、私はお釈迦さんの教えに反していると思います。仏教徒のみなさんに私が言うようなことではありませんけれども、「少欲知足」、足るを知らなければいけないということが、これからの地球あるいは人々の幸福というものを維持していくための一番大切な教えだろうと、私は思います。長い時間いただいてしまいました。終わりにします。ありがとうございました。

（拍手）